

第1章

私の根っこ、日本人の根っこ

- 出家しようと思っていました 12  
「行為」が人格をつくる 16  
ロゴス・パトス・エトス 26  
「信じる」「信じない」の境界で別の扉が開く 30  
今さらですがテーマは四つの柱 34

第2章

まずは専門分野からお話ししましょう

——「司法」「教育」

- 更生を支えてくださる「零細」の方々 46  
裁判員制度はどうなる？ 50  
子どもたちに宗教教育を 57  
大学の先生は大変 62  
消費者体質から抜けだそう 69  
「いじめは許さない」という空気を 73  
体罰は心身にダメージを受ける 76

第3章

身近な人の姿を通して考えました

——「医療」「介護」

- 父を看取った経験から 80  
グループホームの運営のカギは「人」 84  
自然死のほうに上手に死ねる 89

「出生前診断は「新しい生苦」 96  
ダウン症の子どもはゆっくり育つ 101

#### 第4章

### 浄土真宗の裾野は文化の宝庫 ——「文化」

お盆、正月、報恩講 108  
各地に残るユニークなお齋文化 110  
寺内町は信心共同体 113  
親しみやすいがわからない「易行難信」 118  
行為様式が生きる力になる 121  
宗教の裾野を大切に 126  
モンゴロイドは川の字で 132

#### 第5章

### 僧侶(釈)と門徒(大平)の仏教生活 ——「浄土真宗」

願いごとをしてはいけない 138  
絶体絶命のときに響く『歎異抄』 145  
仏になって再び還るとは? 151  
自力と他力——私の親鸞聖人像 158  
自分が立派だと思っただらダメ 163  
子育ては楽しい 168

#### 第6章

### 成熟社会をしなやかに生きる

心やさしい若者たちへ 172

「居場所」をつくる

183

お寺のモデルもいろいろある

187

巻き込まれキャンペーン

191

おまかせ体質になろう

195

正しいこともだんだん偏る

202

ネットする？ しない？

206

おわりに 大平光代

## 出家しようと思っっていました

大平 釈さん、はじめまして。釈さんのご著書は以前からほとんど読ませていただいていたので、ずっとお会いしたいと思っっていました。

釈 それはありがとうございます。ところで大平さんは仏教の勉強をされたそうですね。

大平 ええ、浄土真宗の中央仏教学院通信教育部を卒業しています。二十代の頃から漠然とですが、四十歳になれば出家しようと思っっていました。

釈 ほう、そうですね。浄土真宗はごく普通の生活を送りながら仏道を歩むという教えなので、「出家」という形ではないのですが……。

大平 そうなんです。私たちは仏門に入ることを「出家」というふうに言っしまいました。すが、厳密に言えばそうじゃないんですね。

釈 特に浄土真宗では僧侶の意味が大きく変質しています。

そもそも「出家」という生活形態の起源は古く、仏教成立以前からあります。また仏教以外の宗教にも見られます。「自分の都合を小さくして生きる」や「神にわが身をささげ

る」といった姿勢が、このライフスタイルを発達させてきました。たとえばキリスト教で言えば、修道士さんや神父さんは出家者に近く、牧師さんは浄土真宗の僧侶に似ています。仏教の出家の場合、特に暖かい気候風土の地域で根づいていますね。

大平 そうですね。出家僧は薄い袈裟けさを着ていますので、厳寒の冬を過ごすのはちょっと難しいですね。

釈 布三枚で暮らすのでロシアでは無理、とか（笑）。もちろん、寒い地域では袈裟の下に何かを着るのですが、日本の場合は、下につける着物が法衣として発達しました。

もうひとつ、そもそも、ホームレスのような生活をしている人を聖者として敬うやまつい施ほごす文化が土台にないと成り立たない。だから日本では出家というライフスタイルが日本風に変貌して、結果的には出家と在家の境がなくなるという方向へと動いてきました。お坊さんが結婚しているのは、日本仏教の大きな特徴です（笑）。

大平 「出家」というより、「僧侶になる」と言っただほうがいいですね。私は四十歳になったら僧侶として残された人生を生きようと思っ、いろいろな方法を考えていたのですが、たまたま中央仏教学院が私の条件に合っっていたのです。

釈 他の宗派でのお得度ということも考えられたのですか。

大平 私はどちらかと言うと、なんでも自力でするタイプです。人生をやり直すことを決意したときも、それ以後ずうっと毎月一日には宝塚市の清荒神きよこうじんにお参りに行っていました。たぶん特別な事情がなければ、高野山の門を叩いていたかもしれません。

釈 ほう。それがどうして浄土真宗に？

大平 仏門に入るつもりで法律事務所をたたむ準備をしていたのですが、当時五十人ほどの少年少女たちとメールのやりとりをしていました。リストカットをしたり、拒食や過食で苦しんでいるこの子たちと完全に連絡を断つことは難しかったです。ですから、社会から閉ざされたところで修行をするという方法はとれませんでした。それから、私の父方は真言宗でしたが、母方の祖母は熱心な浄土真宗の門徒で、家には神棚かみだもお札おまも何ひとつなくしてお仏壇だけでした。その両方を見て育ちましたが、私はどちらかと言うと母方の祖母の影響を強く受けました。両親が共働きでしたから、学校が終わったら祖母の家に行つて、お仏壇に手を合わせて、おやつはお仏壇のお供え物のお下さがりでした。だから道を踏み外していた頃も、「まんまんちゃんが見てはるよ」という祖母の言葉がいつも心の真ん中にあつたような気がします。なので、中央仏教学院を選んだのも、何か見えないものに従われたのかもしれないと思っています。その後、大阪市の助役になったり、結婚して子

どもを授かったり、ひよんなことが続いて僧侶になる計画はまだ実現していませんが……。

釈 釈さんはお寺の生まれで、それこそ浄土真宗的な感性の中で育つてきておられますが、どんな感覚なんですか。嫌きらだったことはありませんでしたか？

釈 私の場合は全然抵抗がなかったんですよ。ただ、自分は宗教性が豊かではないという自覚が小さいときからありました。宗教的なセンスが悪いっていうか……。なんでそんなことを自覚したかという、周りに宗教性豊かな人が大勢おられたからなんです。たとえば、お寺の近所にみんなが尊敬するような念仏者のおばあちゃんがおられました。子ども頃、朝起きて二階にある自分の部屋の窓を開けたら、毎朝必ず本堂の前でそのおばあちゃんがお念仏してはるのが見えるんです。あるとき、その人に後光が差しているように見えたんです。お念仏してる姿が光り輝いて見えました。その人の周りの空気が歪ゆがむようなたたずまいでした。言葉でうまく言えないんですけど。私はそのとき、「ああ、あそこに仏さまがおられる」と感じたんですよ。そういうホンモノの人たちが身の回りにいてはつたので、どう考えても自分はあるのになれないと実感していました。

大平 「仏さん」というと亡なくなった人のことだと思ってしまうですが、そうではないの

ですね。子どもの頃、刑事ドラマが大好きで、「太陽にほえろ！」や「特捜最前線」や「部長刑事」をよく見ていたのですが、刑事役の人が亡くなった被害者のことを「仏さん」なんてよく言っていましたからね。私、「太陽にほえろ！」で露口茂さんが演じた山さんさんが大好きでした。

釈 あはは（笑）。「死んだら仏」信仰ですね。これはこれでいくつか論点があります。仏道を歩むことなしに、ただ死ねばそれだけで仏に成ることはあり得ません。でも、「死ねば仏」が支える日本文化圏の宗教性も、なかなか侮あなどれません。

## 「行為」が人格をつくる

釈 話を戻しますと、私はそのおばあちゃんのような念仏者に囲まれて育ちました。その人たちが集まる場所のお世話をさせてもらうのは全然嫌じゃなかった。自分自身はとてまあんな念仏者にはなれないとわかっていましたが、その人たちが集まる場所のお世話だったらできそうな気がしました。また、集まる場を途絶えさせるわけにはいかないという気

持ちもありました。

大平 そのような人って、どのようにしてつくられるのでしょうか。幼い頃からの習慣なのか、あるいは何かきっかけがあったのか、お念仏が自然と口から出て、頭が下がるというのはなぜなのでしょう。

釈 そのおばあちゃんは、若い頃、生きることが苦しくてお寺参りを始めたそうです。ただ、もともと浄土真宗の熱心な地域で生まれ育ったみたいですね。浄土真宗という宗派は、寺内町じうちょうと呼ばれるような独特の「篤信地域」を生み出す特性を持っています。そういった土壌が、ある種の宗教的人格を育はぐんできたのは間違いありません。そこにはお仏壇中心の生活様式や、常にお念仏を称よまえさせていたたく行為様式があります。

大平 子どもの頃は「なまんだぶ」と祖母の真似をしていましたが、あるとき、自然に自分の口からお念仏がこぼれ出たというような記憶があるんです。これは非常に大きなことだなど思っています。

釈 真似を続けているうちに、あるとき「口からお念仏がこぼれ出る」とは、言い得て妙ですね。何か大きな流れに導かれている感が伝わります。大きな流れの中に身を置くことが、生きる力を根源的に支えてくれる気がします。